
光と闇

ミーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇

【Nコード】

N6895X

【作者名】

ミーさん

【あらすじ】

あの闘いから17ヶ月過ぎた。死神の力は皆のお陰で取り戻し家族や友人達を失わずに済んだ。だが…

10話夢を書き直し&追加いたしました。

虚（前書き）

初です。

グダグダですが、宜しく願います。

虚

月の光を浴びながら屋根を駆け抜ける一人の青年がいた。上下黒い着物に身を包み、背中に見えるのは大きなサラシの用な物に巻かれた大刀…一番目立つのが風に靡くオレンジ色の髪。

駆け抜ける先には仮面をつけた虚と呼ばれる化け物が一匹。

「地域担当は何やってんだ」

青年は、そんな化物に追い付き背中にある無骨な大刀を手に取り布が巻いてあつた晒しがサラサラと解かれる…と同時に虚目掛け一気に降り下ろす。

「グオオオオオー」

虚は断末魔の叫びとともに塵の用に消えていく。

「ふう…イツチヨあがり」

月の光に照された人物こそ死神・黒崎一護であり将来隊長と噂されている人物である。

目次（前書き）

続きです。

日常

「ゲツモーニーンー護！！」

と、ドアから勢い良く飛び蹴りを繰り出して来たのは一護の父・黒崎一心である。普段お茶ら毛て見えるが家族の事を第一に考える（娘達限定？）良き父親でありそして死神でもある。一護は、その飛び蹴りを交わすと手を顔面に充て床に叩き落とす。

「朝っぱらから毎度毎度何考えてやがる！！このクソ親父！！」

「何を言う！父さんのスペシャルファイティングドロップキック（長い！）を何故避ける？！」

「うるせー朝っぱらから近所迷惑何だよ！！少しは大人しくしやがれ！！このクソ親父！！」

ボキバキボキ！

「ギャー！！！！」

と、言う悲鳴が朝から木霊した。

「お兄ちゃん！ご飯出来たよ〜！」

と、下から遊子の声

「おう、今行く！」

「あれ？お父さんは？」

「上で伸びてるんでしょどうせ直ぐ復活するって掘ったときな遊子」

「ふうーん。そ」

何とも素っ気ない娘達である。だが、娘達の聴こえたのか？

「遊子夏梨どうして父さんにそんなに冷たいんだ〜！？父さん悲しい！」

「ほら復活した」

「母さん娘達が思春期なのか娘達が構ってくれないよ〜」

と、言いながら真咲遺影特大ポスターに向かって泣き真似をする一心。

其をよそに、

「さ、ご飯食べよ。」

「」「頂きます。」「」

「……！母さ〜ん！娘達が冷たいよ〜」

「一生やってる！！このバカ親父！！！！」

「ね〜！速くご飯食べちゃってよ！片付かないでしょ！」

「・・・はい・・・。」

食事を終え

「行つてきます。」

「そんじゃ、俺も行つてくるぜ」

遊子も夏梨も霊力が有り遊子はウツスラしか見えてなかった霊ははつきり見える用になり、また夏梨は霊的濃度が更に磨きがかかった。空座町は、そんな霊的濃度の高い人が多いため死神が重点的に見廻りをしてきている。

睡魔（前書き）

携帯だとちょっと厳しいね。

睡魔

「夏梨ちゃん…起きて…ねえ、起きてっば…」

遊子が揺り起こす。

「うう…誰？」

寝惚けていた為かいきなり遊子の腕をおもいつきり掴んだ！

「痛いよ！夏梨ちゃん！」

少しの間ぼんやりしていたが、臆て覚醒し…

「あれ？」

「もうお昼だよ！夏梨ちゃん。翠子ちゃんと一緒に食べよ！早くしないと時間が無くなっちゃうよ！」

「うん、分かった」

そう言いながら翠子と三人で食べ始めた。

ふと遊子と夏梨は何げなく窓の外を見た。

「ねえ？二人してどうしたの？」

翠子は二人が同じ方向を向いて惚けーとしていたので聞いた。

「「え？」」

「だつてさあ〜二人して窓の外なんか見ちゃつて…何か見えるの？
……まさか！！また幽霊！？」

「「…うん」」

「やっぱりね。だと思つた。最近、二人して同じ方向見たり、それに双子だからかな？夏梨は、前から幽霊さんはつきり見えてるのは分かつてるけど…遊子つてそれほどでも無かつたでしょ！」

「あと、授業中先生には分からない用に居眠りしてるよね。先生の目は誤魔化しても私の目は誤魔化せないよ！二人ともホント〜に大丈夫？」

普段、遊子も夏梨も授業中滅たに寝ることはない。だが、此处最近眠くて眠くてしょうが無いのだ。

「「……………」」

二人して何も言えずに、遊子と夏梨は、顔を見合せた。

その頃、虚を発見した。

エリート死神？アフロさん？いやいや多分芋山さんだ！！

「えーい！このエリート死神！車谷源之助を嘗めるなー！！」

「それと名前を間違えるんじゃないぞ！チキショー！」

と、虚を倒していた。

存存（前書き）

最近？コソの姿が見えないような？

存存

「ねえ夏梨ちゃん…私たち最近変だよな。授業中に居眠りしちゃったり朝早く起きれなかつたり…って聞いている？夏梨ちゃん！」

「?…うん。」

夏梨と遊子は、下校途中歩きながら話していた。だけど何処か夏梨は上の空…

「此の儘続いたら授業に付いていけなくなっちゃおうよ！」

遊子と夏梨は困っていた。それは、本当に遊子が言った事は、間違いでは無いし、自分も勉強に付いていけなくなるのは嫌だ。それに夢の事も気になる。

まあ、夢と言っても全て覚えて居る訳でわない。

二人は、何故かは分からないが最後は誰かの手が目の前に差し出され、その手を掴もうとした所で目が覚めるのである。

「「ただいまー」」

「おう、おかえり。」

今日は、カレーだからね。

と、言いながら着替えをしに二階に…

「夏梨ちゃん、お父さん、…あれ？まだ、お兄ちゃんまだ帰って来てないよね？」

「遊子！はい、これ！」

夏梨は、驚掴みにしたコンを遊子の前に差し出した。

「キヤー！ポストフー！」

遊子は、コンをギューと思いつきり抱きしめた。

「（グオ！イジゴ！…ハ、ハヤクカエツギヤー）」

夏梨は、満面の笑みをしながら…

「あー！お腹すいた。」

と、言いながら遊子が装ってくれたカレーをテーブルの上に並べた。

その後で見ていた一心は、ニヤニヤしながら笑いを堪えていた。

「（この際、誰でも良い！だずげでー！）」

コンの心の声が響く事は無かった…

心的（前書き）

遊子と夏梨はつかし。そろそろ…。

心的

遊子は、夢の中にいた。自分は何処に居るのか？

廻りを見渡せば、水晶のような大きな柱が幾つも連なっている。

目の前には、人らしき人物が…それと…後ろにもう一人？

その目の前の人物らしき人を見れば、自分の母親に似ているくらい暖かくそして優しい雰囲気的人物。すると目の前に、フワリと降り立つ。

聴て…その人物は、手を差し出し。その手を握ろうと…

『……………』

「うう…お母…さん？」

「？遊子…」

夏梨は遊子が普通の夢を見ていたのだと思ったが…もしかしたらと思ひ、

「遊子！もしかして普通の夢を見ていたんだよね…？内容覚えてたりしてる？」

「ううん違う…て言うか…今日は全部覚えてるよ。」

「どんな？」

「うん。えつとね。廻りが水晶で囲まれててね、目の前にね、不思議な人が居てね、それとね…暖かくてそれから…いつもと同じだね。」

「

「ふううん。わかった。」

「あ！いつけない！！朝御飯！！」

「もう、お昼過ぎだよ。」

「あれ？」

遊子は、時計を見て午後3時を過ぎている事に驚き、

「ごめんね、御飯造らなくちゃいけないのに…。」

「大丈夫だよ。私もつい30分位前まで寝てたからさ。あと、遊子が起きないから親父がもう少し寝かせてあげなさいって要ってたから。」

「…でも、私、夢は見てたけど全然覚えてなかったな…。」

「あ！そうだお兄ちゃん帰ってかた？」

夏梨は、首を横に降った。

「わからない。」

「来たら夢の事相談しようよ。」

「たね。」

二人は、二階から降りた。

「おう。遊子、夏梨起きたか。それと、学校には連絡したから安心しろ。」

「うん。わかった。」

遊子は、父親に兄が帰って来たのかを聞いた。

「お兄ちゃん帰って来た？」

「!?!」

一心は、顔には出さないが暫くの間、誤魔化さなければならぬ。め。

「いや、帰ってきてないぞ!暫く帰って来ないとよ。」

「えー!私と夏梨ちゃんお兄ちゃんに相談したい事があったのに!」

「なに!一護に相談だど!父ちゃんじゃ駄目なのか?」

と、大きなリアクションを取る一心に対し、

「えーだって、お父さんに相談何かしたくないもん。」

一瞬一心は、固まり…真紀特大ポスターに行向かって、

「ああー!母さん!やっぱり思春期なのか娘達が相談もしてくれないよー!」

「当たり前だよ。何で親父に相談しなくちゃいけないんだよ！」

「心は更に泣いた？」

託す

尸魂界では、緊急隊首会が開かれていた。

それは、黒崎一護が現世から消えてしまった事について論議していた為である。

黒崎一護は、いわば護挺十三隊に取って命の恩人であり、藍染惣々助を打ち破った功労者である。

そして、現世と尸魂界を救った人物。その、黒崎一護が理由もなく失踪するのは可笑しい。

「黒崎くんは、まだ見つからないのか。」

浮竹は残念そうに言葉を発した。

「今、刑軍を率いて現世、虚園に、全力で隈無く探している所だ。」

「技術開発局も引き続き探してはいるが、一向にセンサーに引っ掛からないヨ。大体あの男は、霊力を何時も垂れ流しているじゃないかね！」其々意見を言い終え、総隊長、山本元柳斎重國が杖を床に叩いた。

「合い分かった。では、引き続き、現世、虚園を調査する用に！以上解散！」

隊長や副隊長達が各隊に戻って行くなか、浮竹はルキアと共に廊下を歩いていった。

「浮竹隊長。一護の事なのですが…」

「朽木、自分の手で一護くんを探したいのだろう。」

「…はい。」

「朽木、阿散井くんと一緒に現世に降りて探して来るといい。」

「白哉には、もう話を通して置いた。」

「あ！ありがとうございます。浮竹隊長。」

だが、ルキアは気付いた！自分が抜ければ、副隊長としての仕事を浮竹隊長に全部押し付けてしまう事に…

「あの、隊長！！」

「大丈夫だよ、朽木。仙太郎と清音が私のサポートをしてくれる、朽木は、今、自分がしなければならぬ事をするが良い。」

今度こそルキアは、浮竹隊長に頭を下げ礼を述べた。
六番隊では…

「恋次。」

「はい、隊長？」

「今からルキアと共に現世に赴き、黒崎一護を探すように…」

「ルキアとですか？…分かりました！！隊長！！！」

十番隊の一室では…

「隊長。ルキアと恋次が、現世に降りて一護を探すって言っじゃないですか!!」

「そうだな。」

「私達も現世に降りて探しましょうよ隊長!!」

と、言いながら、日番谷は松本の机を見た……突然部屋の温度が下り始めた!

「松本……」

「何ですか、隊長?」

日番谷は、拳を震わせながら静かに…

「俺が帰って来るまで、書類を片付けろと言ったハズだよな?」

松本は、これはヤバイ!と、思い逃げる準備をするが…

「え?えー!!!!」

すでに、逃げられない用に松本の足元が凍って地面から離れない!

「まっつゝもっゝ!!」

「きゃー!!!すみませーん!隊長ー!!!許して下さい。」

「誰が許すモノか！！キツチリ仕事はして貰うぞ！松本！！」

何時も逃げられている日番谷は、今日こそ絶対に逃がさない！と、意気込む！！

「ごめんなさい」

十番隊の一室では、松本が書類を終わらせるまで、一切外出禁止と扉を氷漬けにした。

雨乾堂にて、

「浮竹く居るかい？」

「入るよ浮竹。」

「享樂。」

「良いよ。横になっててさあ」

「いや起きるよ。」

「で、どう思うっ？」

「何がだ？享樂？」

「またまた、分かつてる癖に、」

「ふう…一護ちゃんが失踪してから空座町には、虚が出現率が上がった。これは偶然なのか？」

「だが、考えたくは無いのだが、一護くんは捕らえられて何処かに閉じ込められて居る可能性が有るかも知れない。」

「…それは、…或るかもね。」

「享樂、もしかしたら…四十六室が関わっているかも知れない…その上も…。」

「チヨット待つてよ！それは…否定はしないが…だが、現世には、浦原君と四楓院君が居て、尚且つ一護ちゃんの父親まで要るんだよ。そんな彼らが見過ごす筈がないでしょう。」

「それと、一護ちゃんも争闘強いんだからさ。」

「俺だつてそんな事は考えているんだからな享樂！」

「だが、まず一護くんを早く探し出さなければ…」

「（頼むよ二人供…）」

困惑（前書き）

次は、一護くんです。

困惑

一護は、薄暗い廊下をひたすら歩いていった。

それは、自分が何処を歩いて居るのか何処に居るか…いや…だが、此処は霊子が濃いから尸魂界に居る事はわかつている。

一護の腕には、霊圧制御装置が嵌められていて、多分壁は、殺気石だろう。

こんな場所に居たら体力だけじゃなく魂魄にまで影響してしまう。

まあ、霊圧制御装置が嵌められている時点で抵抗など出来ようがない。

「畜生！」

壁には、殺気石、自分の腕には霊圧制御装置で押さえられ、魂魄までもがダメージを負ってしまう前に何とか脱出したい。

「でも、俺を此所から出ないため…でも何故？」

奏功する内に一番奥の部屋へとたどり着いて部屋の中に入った…そしてドン！…と言う音が響いた。一護は、後ろを振り返り、

「な！」

さっきまで歩いてきた通路が無くなり、其処に在るのは壁だけになっていた。

一護は、仕方なく辺りを見渡し必要最低限の物と寢床が用意されて居る事を確認し、壁に寄り掛け窓の外に目を向けた。ふと見上げれば、小さな窓から見える月の光に照らされた月を見て…

「あいちら今頃どうしてつかないかな…。」

それは、現世に居る自分の妹、遊子と夏梨、親父、そして友人や仲間達の事を考えていた。

ここに捕まる前…

一護は、虚を察知し被害が出る前に倒そうと公園に来ていた。

そこでは、男の子がブランコに座り何処かキョロキョロと周りを何かを探す用に辺りを見渡していた。

見れば子供は霊体で、因果の鎖りが付いていた。

一護は、先程虚が彷徨っていて危ないので、先に男の子を魂葬させようと目の前まで行った。

声を掛けようと男の子の前まで行き、しゃがんだが…男の子は顔を上げたとたん…

「捕縛！」

「な！！何だ！これ?!！」

一護の足元から大きな陣の用な物が実現し体が動かなくなってしまう。

そして、男の子は一護の額に人差し指をあて…。

「お眠り下さい。黒崎一護…」

…そこで完全に意識を失ってしまった。

学校（前書き）

続きです。

学校

「おっはよーう、たつきちゃん、石田君、茶渡君！」

「おはよう、織姫。」

「おはよう、井上さん」

「ム…、おはよう、井上」

「あれ？今日も黒崎君来てないんだ。どうしたんだろう。」

と、後ろからダッシュで駆け抜けて来た人物、浅野啓吾である。

「おっはよー、皆の衆！おはようございます。井上…グアー…！」

たつきの右ストレートパンチが、決まった。

「何やってんだ！あんたは！織姫に指一本でも触れてみる！私が容赦しないからな…！」

「ズミマゼン」

「大丈夫？浅野君…。」

「気にする事は無いと思うよ井上さん、どうせ一護の事だから何処かバイトとか何かなんじゃないかな？」

あと、一護の親父さんが…

（家の馬鹿息子！まだ、帰って来てこないんだよ。朝早くから悪い

な小島君！)

…何て行ってたから大丈夫だと思うよ。」

と、啓吾の頭に乗った状態で、携帯片手で操作しながら話す水色。

「水色君！」

「おはよ、井上さん」

「おはよう、水色君」

「でも、ここ最近、黒崎君の霊圧が感じられないよ。やっぱり何か遇ったんじゃないかな。」

「ム、一護の事だから、尸魄界にでも行ってるんじゃないか？」

「だと良いんだけど…」

「ハイハイ、織姫は一護の事心配なんでしょう。」

「全く、一護の奴私の織姫を心配させる用な事をするんじゃないよ。今度会ったら一発殴ってやる！」

「たたた、たつきちゃん！！」

「お前らー、出席とるぞーっと。何だ？黒崎はまた休みか？おーい、誰か黒崎の行方しってる奴いるか？」

「……………」

生徒全員一斉に首を横にふる。

「そうか、仕方がない。誰か、黒崎に会ったら伝えるよ。卒業したいのならちゃんと学校に来いとな。お前らわかったな！」

「（それで良いのかこの先生？）」

「わーい！終わった終わった！次は楽しい楽しいお昼休みだよ！」

「ハイハイ、織姫はお昼になると元気イッパイになるね。」

「たつきちゃん、皆で屋上で御飯食べよ。」

「わかった。」

そして屋上で、

「皆で食べれば御飯が美味しいよ。」

「井上さん。」

「何？石田君。」

「黒崎は、本当に尸魂界に行ったのか？」

「だが、行ったとしても…コンを黒崎の中に入れて学校に通わせれば良いんじゃないか？」

「…。そうかも知れないけど…？」

「流石に、一週間以上も現世に居ないのはどうかと思つよ。」

「ム、なら一護の親父さんに聞くか？」

「「「！！！」「」」

「虚だ！」

上を見上げれば、一気に五体も出現した。

「石田君、茶渡君！！！」

「井上さん皆に三天結盾を…。」

「わかった！行くよ！火無菊、梅蔵、リリイ、三天結盾！私は拒絶する！！！」

井上の前に、三天結盾を張り、その裏に、たつき、啓吾、水色が後ろに…

石田、茶渡、井上は、戦闘準備を整えた。

「…ねえ？何で虚は襲って来ないの？」

と、たつきが言った。

虚は襲って来る処か、ここを見ずに、一定の方向を見て飛び立とうとしていた。咄嗟に石田は、直感でマズイと思い銀嶺弧雀を向け弓を引いていた。

虚は、何事も無く滅却された。

「何でいきなり五体も出現したのかな？」

「虚は、普通集団になって出現したりしないはずだ。」

「ましてや破面が近くにでもいるのか…？」

「オーイ！井上！」

「あ！朽木さん！！！」

「朽木さん現世に何時来ていたのかい？」

「到着したのは、今しがた着いたばかりだが…？。その時、ルキアの後ろから、」

「あ！恋次君」

「よ、元気か？テメーラって…あれ？」

「一護の野郎どうしたんだ？あいつは、教室か？」

「え？何を行ってるんだ阿散井！黒崎は、尸魂界に言ってるんじゃないのか？」

「嫌、あいつは尸魂界には、来てねえぜ。」

「何！では、あやつは何処へ行ったのだ？」

ルキアと恋次は、一護の霊圧を探した。

…が、無論霊圧は引っ掛からない。

「居なくなってから一週間以上学校に来てないんだ。」

「ところで、阿散井君。」

「何だ？石田。」

「君達二人は、なぜ現世に？」

「あー。最近、空座町に虚の出現率が上がってな、その調査だ。」

「だが、可笑しいのだ。此処ら周辺にだけ出現するのだ。」

「と言うわけだ。」

「だから、お前らも注意しろよ。」

全員納得した。

「あと、一護の件は私と恋次に任せろ！必ず何処かにいるはずだ。」

「ありがとう。朽木さん！」

「何、心配する必要はない。」

「んじゃ、またな！」

と、行ってルキアと恋次は飛んで行ってしまった。

学校（後書き）

先の話になりますが、一織か、一ルキにしたい。と、思っています。

心配

二人が、飛び去った後、

「黒崎くん……。」

と、心配する井上を全員が、宥めるように、

「織姫、大丈夫だよ。一護は、此処に戻って来るよ。」

「井上さん、一護の事だ、絶対皆の前に帰って来るって。」

「何か会ったら直ぐに朽木さんから連絡があるはずだ。」

「それでも……。」

「分かってるよ、井上さん。僕たちも全員同じ気持ち何だから。」

「ム……一護は、大丈夫だ。井上。」

「なあ、ルキア。」

「何だ、恋次？」

「石田達に教えなくて良かったのか？本当の事を……。」

「……石田達に教えた所で、一護が現世に居ないのは明らかだ。それに、井上を余計心配させる用な事を、私はしたくない。」

「一護の奴！何処に行ったんだよ。」

丁度その頃…

浦原商店の店主浦原喜助はある人物と密かに話していた。

その人物、黒崎家の大黒柱、クロサキ医院を切り盛りする黒崎一心である。

「わかりました。時間はかかりますが、必ずやりとげます。」

一心に、頭を下げる浦原。

「ほー、こ奴に頭を下げるかー。」

猫の姿で音も無しに現れたのは、四楓院夜一。

。猫姿では居るが、美しい黒い毛並みと自慢の尻尾がお気に入り。

「嫌だなあ〜夜一さん。」

扇子をパタパタと扇ぐ浦原。

「で、どうだった、夜一。」

「護挺隊は、気が付いたが何処に閉じ込められたのかは分からないじゃろつ。」

あやつらは、自分達の手で一護を強制的に捕えたのじゃな。

それと、一護の捕らえられてる場所は特定できた。

一護をどの様な手段を使って捕らえたかは分からぬがな…戦闘になれば、あやつらは皆、一護には敵うまい。それに、護挺隊が一護を捕縛する用な事もまずあり得ないしの。」

「…やつら強行突破するつもりじゃろうな。どんな手段を使っても…。」

「「……。」」

「息子さんは捕まってしまった以上、今は直ぐに手は出さないと思います…極刑される前に…何とか…。」

「…ち、あの連中…。」

浦原は、少し考える素振りをして、時計をみた。

「一心さん、もうそろそろ帰らないと娘さん達が帰って来てしまいますよ。」

「それと…娘さん達も大変ですね。色々と…ねえ。」

一心は、目をスーッと細めた。

「…嫌だな〜！冗談ですってば〜、」

「喜助、お前の冗談は、冗談を言ってるように聴こえん！」

浦原は、冷や汗を吹き出しながら扇をパタパタと、必死に扇いだ。

そして一心もまた時計を見るなり。そろそろ娘達が帰って来る時間なので帰る事に。

「…そうだな邪魔したな、浦原。」

「いえ、いえ。お気をつけて。」

猫姿の夜一は、お気に入りの座布団に腰掛けて、一心に、

「娘達にちよっかいを出して愛想尽されぬようにな！あの年頃の娘達は、繊細なんじゃから。」

と、ゲラゲラ笑いながら楽しげに尻尾を降っていた。

一心は、立ち止まり夜一の方に振り向き眉間の皺をよせ更に皺をプラスして…

「掘つとけ！大きなお世話だ、夜一！！」

などと、排他。

「あ！そうそう、朽木さんそちらに送って起きますねえ！」

「おう、分かった。」

そして、一心は自宅へと帰って行った。

……

「流石親子！！似てらっしゃいますね。」

「そつじやな。」

しばらくして、

玄関の戸を開け、

「浦原、浦原は、おるか？」

そこへ、大男…いやヒゲをはやしたオッサン…か…いや…これは失礼？

高位の術を使いこなす鬼道の達人、握菱鉄裁が姿を現した。

「これは、これは、朽木殿と阿散井殿。ささ、店長かお待ちしています。さ、中へ。」

ルキアは、テッサイが行った事を理解し…そして、青筋を立てながら中へ入って行った。…

中では、陽気に扇子を口元に持っていきながら…

「いやあくお待ちしておりました。朽き…グハ…！！！」

「何が！何がだ！お待ちしておりましただ！！このタワケが！一護が現世に居なくなってしまう理由、貴様知っておるだろう！！！」

ルキアは、浦原に思いっきり顎にチョップと腹に足蹴りを喰らわし
吹き飛ばした。

「ぐえ、い、痛いですよ！朽木さん！」

恋次がルキアに聴こえるか聴こえないくらいの声でボソッと…
…、

「うお〜こえ〜な〜。」

ルキアは、後ろを振り返り、

「恋次！貴様今何か言ったか！」

恋次は、何も言わず、ただ首を横に降ったのである。

「いや、何も要ってないぞ俺は…。」

そこで、浦原は、

「まあ此処で話するのは何です。中へどうぞ。」と、行って二人
を中へ通した。

夢（前書き）

申し訳ありません。

書き直し、又は、追加させて下さい。

この小説を見て下さってる方々誠に申し訳ありません。

― 護君どんどん追い詰められてる感じです。

夢

「ただいまー」

「おう、おかえり。」

遊子は廻りを見渡しながら、誰かを探している。

「お兄ちゃんは…まだ帰って来てないの？」

「あれから帰って来て無いぞ！その内帰って来るだろうよ。」

「お父さんは、お兄ちゃんが心配じゃないの？お兄ちゃんに、何か会ったら私許さないんだからね！！」

遊子は少し涙目になるが、そこは泣かない。

「遊子…父さんよりも一護を選ぶのか…父さん悲しい」

と、言いながら泣く一心に対して、

「お父さんいい加減早く子供離れしてよ！！」

一心は、一瞬固まり、

「！！母さん！！今日の遊子は何だか冷たいよ。」

と、言いながら真咲特大ポスターに向かって泣く一心を余所に、

「今日の晩御飯は何を作ろうかな〜！」

などと、一心に突っ込みも言わず、そのまま着替えをしに二階へ上がって行ってしまった。

しばらくすると着替えてきた遊子がせつせと料理を作っていく。

「ただいまー。」

「おじゃましますわ。」

「え？もしかして、ルキアちゃん。」

遊子は、台所のガスコンロを止め、玄関たで小走りで来た。

「帰りに偶然居合わせたんだ、ルキ姉が家に行く所だったから、一緒に連れてきた。」

「そっか！！取敢えず上がって上がって！！」

遊子は、目を輝かせながらルキアの手を取り、リビングに招き入れる。

「ねえ！ルキアちゃん。」

腕を引っ張りながら、リビングへ

「お兄ちゃんと一緒じゃあないの？」

「いいえ！一緒ではありませんわ。」

と、妙なテンションで返すルキア。

リビングに入ると娘達の父・一心と目が合い、

「おう、久しぶりだな、ゆっくりして息なさい。ルキアちゃん。」

「お久しぶりですわ、おじ様」

頭を下げるルキアに対して遊子は、

「ルキアちゃん、また暫く泊まってってくれるんでしょ！」

遊子は、更に目を輝かせながらルキアに強請る。

「ねえ、お父さんいいでしょ！」

「ルキアちゃんは家の大事な娘だ！いくらでも泊まっていきなさい
」！」

親指を立てながらウインクする一心。

「はい。ありがとうございます。」

「やったー！一緒に晩御飯食べよ。」

その後ろで夏梨は、考えて事をながらルキアを疑いの用な目で見つ

めていた。

そしてルキアは、黒崎家に泊まる事になった。

一護の部屋に入り戸を開けたとたん待つてましたと言わん秤にルキアに抱き着こうとする。

「姉さ〜〜うおおグウ!!!」

「コンお前は少し黙って居ることは出来んのか!」

ルキアはコンを掴んだまま、

「一護は、今居ないのだぞ!」

戸の後ろから声がした。

「ルキ姉!入るよ。」

「おお何だ夏梨?」

「次、お風呂入って良いよ。」

「ウム分かった。ありがとう夏梨。」

ルキアの手に持っていたコンを見て…

「そのぬいぐるみ私が見ててア・ゲ・ルね。ルキ姉。」

「おおそうか。では、頼む夏梨。」

コンは涙を流しながら夏梨に訴える。

「頼む夏梨〜遊子には〜」

「そんなのム・リに決まってるじゃん。」

「頼みます。神様、仏様、夏梨様〜許してえ〜!!」

「それじゃ安心してお風呂に入ってね。」

完璧コンの事は無視である。

「それだけわわわ…いやあ〜〜!!」
コンの悲痛な叫び声が響き渡った。

お風呂から上がりリビングに一心がビールを飲んで居たので、今回の事に付いて話した。

「済まなかったね。ルキアちゃん。」

「いいえ。理由は浦原から聴きました。」

「そうか…。」

「ですが、可笑しな話です。我々にも責任はあると思います。何せ一護の死神の力を取り戻させたのは我々護挺と仮面の軍勢を含む全員なので…。」

「それに、我々は後悔などしていません。一護の力を取り戻さなければ、一護はずっと一人取り残されていたに違いありませんから。」

「……………そうか。」

「それと話は別なのですが、遊子と夏梨の霊力が余り宜しくないのでは有りませんか？」

「んーそうなんだよな…ここ最近何だが、な」

「…!まさか虚が出現するのは、遊子と夏梨達が…!?!」

「まあ否定はしねえよ、事実だしな。」

「!!!心殿!!!」

ルキアは、徐に立ち上がって声の張上げてしまった。

「まあルキアちゃん座って、上の二人は相当疲れて寝ちまった用だからな聴こえてないが、一応遊子と夏梨には、お守りと、浦原から虚を寄せ付けない用にある程度の対策は打って在るんだが…それでも虚を寄せ付けてしまつ見たいでな、どう手を打つか浦原と話しをしていたんだよ。まさか、俺達がずっと一緒に居る訳にも行かないだろう。」

「確かに、そうですが…霊圧が極端に上がったたり下がったり…このまま続けば二人は何れ霊圧を制御出来なくなつて虚を更に呼び寄せてしまつかも知れませんか。」

夏梨は、夢の中にいた。

辺りは薄暗くそして寒い。自分は何処かに歩いて要るのだろうか？

ふと見上げれば、丁度雲が晴れて月が

此方に顔を出した用だ。

月が顔を出した所で周りの水晶が輝きだす。

夏梨は、月に照された一番大きな水晶を見ていた。水晶の中から暖かいオレンジ色に輝いた遊子が見えた用な気がする？

「遊子？」

ふと気が付けば後ろに誰かが要ることに築いた。見れば、髪は少し

長く（一護が最後の月牙を習得した位の髪）体から青く輝いて青年を照らす。

「待っていた。夏梨。」

「私の名は、……………だ。夏梨。」

「え？何ていったの？」

「聞こえないか？夏梨。…じゃ仕方ない。遊子と話をしてくるといい。」

夏梨の体から全部を包み込む用に光だし、そのまま眠りに付いた。

気が付けば、自分のベッド、隣を見れば遊子も同じ用に目を開けた。

「夏梨ちゃん。起きた？」

「うん。起きた…。」

「……………」

「夢の中に、夏梨ちゃんが見えた…。」

「私も遊子が見えた。」

「……………」

「この夢何だと思う。」

「私に聞かないでよ！私にも分からないんだから。」

「うん、そっだよね…夢の事お兄ちゃんに相談したいのに何時帰っ

て来るんだろっ…」

「ねえ、遊子。明日ちヨット付き合ってよ。」

「??うん、良いよ。」

「ねえ、夏梨ちゃん…何だか中途半端に目が覚めちゃったね。」

「そうだね。」

だがこの後二人揃ってまた夢の中へ

一護は、この部屋の中にどれくらい居ただろう。太陽が何回上がった何回下がったか何て分からない。脱出するため、色々試してみた。腕には、霊圧制御装置が有るため霊力は使えないので完現術を試してみた。完現術は確かに効果が在るが威力が足りないために、どうやって自分の体を外へ出させるか考えていた。代行証でもあれば、な。

遊子、夏梨、井上達心配し始めてっかもな…。

「はあ、外へ行きたい…。家に帰りてえー」

一護は、ブーツとしながら瞼から透明な液体が頬を伝って落ちてくる。

目を睨れば遊子や夏梨がいてそして井上とルキアが此方を向いて手を降ってくれている姿が見える。一護は、思わず笑みがこぼれる。そして一護は完現術を使い続けオマケに霊圧制御装置と殺気石、体が思うように動かなくなっただけで疲労と睡魔に寄って眠りについた。

決意

「遊子…夏梨起きて下さい!!」

「……………」

気持ち良さそうに寝ている為、

「姉さん疲れてるからもう少し寝かせて上げた方が…」

「ウム分かっておる。今日は休みだし、もう少し寝かせても良いのだが?…いやいや、やはり起こそうご飯が冷めぬ内に。」

などと、ブツブツと二人で会話をしていると二人が起き出した。

慌てて、コンはぬいぐるみバージョンに変幻：イヤイヤ元々アンタはぬいぐるみだって!!」「(?ぬいぐるみじゃないコン様だって言うてるだろ?)」「ああハイハイ。

「んう?あれ朝……………ああ朝御飯!?!」

遊子は、少し寝ぼけた為かボーとして一気に覚醒した。

「おはようございます遊子。」

「おはようルキアちゃん!」

ルキアの服から美味しいそうな味噌の香りが漂う。ルキアは、ニコニコしながら、

「それじゃ二人供着替えて顔を洗ってらっしゃい。そしたら朝御飯にしましょ。」

「はい。うん。」

二人は二階から降りてきた。

「ごめんね。ルキアちゃんに朝御飯作ってもらったやって！本当は私を作るハズだったのに。」

「二人供気持ち良さそうに寝ているから起こすのは忍びないので、それに、たまに休むのも良いのでは？」

「今日はルキアちゃんが朝御飯を作ってくれたんだね！」

「はい。冷めない内に召し上がって下さい。」
と、皆席に付いた。

「あれ？親父は？」

「ホントだ！お父さんは？」

ルキアは引汗を書きながら……

「朝早くから会合だ行って出掛けましたが？」

「ふう〜ん。」

「そうなんだ。」

三人は、席に着き。

「いただきます（わ）」

と、行って食べ始めた。遊子は、味噌汁を突つきながら……。

「あれ？このワカメとメカブ家にあつたかな？」

「ああそれは、彼方から持って来た物ですよ。兄様が沢山買ってしまったのでお裾分けに持って行きなさいと。他にも在りますよ。乾燥ワカメと生ワカメとメカブを持って来たので沢山召し上がって下さい。生ワカメとメカブは冷凍庫への保存が可能なので冷凍庫に入れました。」

その頃、浦原商店では……

「……………いただきます」「……………」

「……………」

「恋次君どうしたの？」

と、井上が聴いてきた。何故井上は、どうして浦原商店に居るかと言うと、黒崎君が心配で家に居る事が出来ず浦原の所まで押し掛けてしまった為此处に居る。

「どういたしました？阿散井殿？」

「うおー顔が近けえって！！」

「で、どうしましたか？阿散井さん？」

「これは…どうしたんだ？」

と、言つて指を刺す。それは…味噌汁の中に有るワカメ…ではなく、隣に有るヌルヌルとした食材で有る。

「ああこれは朽木さんが尸魂界から送つて来てくれた物つすよ。」

「（ワカメの他にメカブが…バ、バリエーションが、ふ、増えてや

がる……！こ、これは……もしかして！？隊長勘弁して下さいよ……」

「美味しいですぞ！阿散井殿！ささ、阿散井殿も早くお食べなさい。健康に良いですぞ……！」

「美味しいよ恋次君??」織姫訳も解らず頭を傾げながら食べる。

「……………」

その頃……一心は、尸魂界にいた。

そこには、一番隊・総隊長・山本元柳斎重國を始めとする、二番隊・碎蜂、四番隊・卯ノ花烈、六番隊・朽木白夜、七番隊・狛村左陣・八番隊・享樂春水・十番隊・日番谷冬獅郎、十一番隊・更木剣八、十二番隊涅マユリ、十三番隊浮竹十四郎の錚錚たる顔ぶれである。

「我々としても全身全霊を持ってアナタの息子さんを救出したいと思っております。」

一心に、頭を下げる隊長達、そしてその中で頭を下げずに総隊長は、

「今回は、話し合いで決着しなければ、我らも……手段は選ばざる終えないと思おて降ります。」

一心の肩に乗っていた、猫姿の四楓院夜一が、隊長全員に言った。

「だが、万一話し合いで決着せぬ場合、手段は選ばぬと言ったが、お主ら隊長の身じゃ限度が有る。その場合、無茶はせぬ用に、良いな。」

全員頷いた。

書く(前書き)

話が強引だけど頑張ります。

晝く

一心は、人通りの少ない廊下を歩いていた。

「夜一さん、一心さんどうでしたか？」

目の前に浦原がいた。目深に被った帽子と全身真っ黒、その服は、前に平子達を助けるために使用した霊力を遮断する物である。

「ウム、隊長連中は皆、四十六室に直談判するつもりじゃ。しかも、白夜坊は、災厄の場合、四代貴族の地位をも利用するらしいからの。」

「ありやりや！？これは凄いですねえ。」

「所で喜助、お主の用事は済んだのか？」

「はい。バッチリつすよ。夜一さん！まあ、万が一、ですからねえ。」

「これは、遊子殿と夏梨殿。」

「今日は、どのようなご用意向きで此方に？」

「うん。あんたの所の店長さん居る？」

「いいえ。只今外出中でして。今日は夜に帰って来る予定だと思いません。」

「店長さんが居ないなら良いよ。また時間を開けて来る。」

「左様ですか。」

遊子と夏梨は仕方なく帰る事に、それまでの時間を遊子が今夜の晩御飯の買い出しをしたい！と、言い出したので買い出しへ行った。

……が、その途中。

遊子と夏梨のピタリと足が止まり、体が急に重く押し掛かる。

「何!?!」

突然空に黒い穴の用な物が幾つも開いて、そこから化け物が沢山出て来る。二人は啞然としていたが、夏梨が正気に戻り、

「遊子!逃げよ!!」

遊子は放心状態で、啞然とさせる中、痺れを切らした夏梨が遊子の腕を掴み思いつき引張って逃げる。だが、逃げても逃げても体が重苦しく何処までも追っかけてくる感じで一向に向上しない。

「キヤーー!!」

夏梨は後ろを振り向くと遊子を捕まえ用と手を伸ばすが、夏梨は遊子の腕を自分の方に引っ張り虚を足で蹴飛ばした。

「うりゃー！！嘗めんな！！」

更に、もう一匹

「オマエ、ウマソウ」

「！夏梨ちゃん！」

後ろを振り返り見た。

遊子は虚との間に又もや捕まえ用と手が伸びたが、合わないと思った瞬間…！

突如遊子を守る用に、光の壁が現れた。

「…！？」

虚は、光の壁にぶつかり吹っ飛んだ！

訳の分からない光景と強い光に遊子は混乱し気絶してしまった。

夏梨は、化け物がなぜ飛んで行ったのか、訳が分からない状態だった。

そして、遊子を守る光が消え地面にコトンと落ちた。拾えば、親父にもらったお守りで

「（このお守りは、昔、母さんが遊子と夏梨の為に作った、ありがたいお守りだ！！肌身離さず持っていないさい！）」
なんて言ってたっけ…。

「ギャヤヤオオー！！ナンダコレハ……」

「！！！」

後ろに吹っ飛んだ虚が再び襲ってきた！

夏梨は、咄嗟にお守りを投げ、遊子を背中に乗せ逃げ出した。

その頃、尸魂界では、

「ご報告申し上げます。」

突然隊長達の目の前に、裏挺隊が現れ皆に告げた。

「何事だ。」

「十二番隊技術開発局より報告。現世空座町に多数の虚が出現。中には、大虚、破面を確認。至急応援要請との事です。」

一番隊舎に集まっていた隊長格は啞然とした。

だが、総隊長は、

「分かった。」

その隣にいた碎蜂が一步前に出た。

「この事を、四楓院夜一様にも報告せよ。」

「御意。」

「たく、しつこいんだよ、はあ、はあ、はあ……」

「っ！！！」

やがて体力の限界に近づいたのか遊子を背負ったまま転んでしまい、虚が遊子の体から魂を引つ張り出してしまった！

「遊子！！」

「ドコミテイル」

遊子に気を取られ自分までもが魂を抜かれてしまった。

右手には遊子、左手には夏梨の魂を抜かれた状態で握られ身動きが取れない。

しかも遊子は鎖がちぎれ二度と肉体には元に戻れない状況になっていた。

それは完全なる現世の死を意味する。

「サテ、ドレヲクオウカ。ヤハリ」

などと、虚が考えて居たとき、遊子が目を覚ました。

「???え!?!」

遊子は、今の状況が解らずなぜ自分は宙に浮いてるのか?なぜ、自分の体が目の前に横たわって居るのか?なぜ夏梨ちゃんと一緒になつて横たわって居るのか?なぜ、自分の体は動かないのか?疑問ばかり浮かぶ?

ふと横を見ると同じく宙に浮いて……嫌、捕まって……更に横を見た!

化物が今にも口を開けて遊子を飲み込もうとしていた。

「キヤーーお兄ちゃん夏梨ちゃん!!!」

「遊子!離せ!この〜!」

夏梨は、動かない体を必死に動かすが魂の状態では俊敏に動かす事など出来やしない。ましてや虚など相手にも出来ない…が、今度は別の虚が現れ

「グギーー!!!」

目の前の虚を攻撃して倒してしまった。

ドサツ!

「うう!」

「キヤー!」

二人は地面に叩きつけられた。

その間虚は三体実現し夏梨と遊子を見るなり手を伸ばす

「キヤー夏梨ちゃんお兄ちゃん」

遊子は涙を流しながら泣き叫ぶ!

夏梨は動かない体を必死に動かし、姉の元へ行くが因果の鎖がそれを阻み手を伸ばす。

「遊子!!!」。

遊子が消えちゃう!本当に遊子が消えちゃう!嫌だ!家族が消えちゃう!強くなりたい!一兄見たいに強く鳴りたい家族をあんな化物なんかに!!!遊子を失いたくわない!

強い力が欲しい…家族を守る力が欲しい!!!

『ならば私を使え!』

「え？」

ルキア、恋次、石田、茶渡井上達は、虚が出現した為その対応に負われた。

「何でこんなにも虚が出て来るんだよ！！」

「知るか！！さつさと虚を倒さんか！馬鹿者！」

「（だが、何故こんなにも虚が出て来る？やはり！）」

「行くぜ！蛇尾丸！！」

恋次は、自身の斬魄刀を掴み地面を強く蹴って上空に！

「椿！お願い！」

織姫も、虚を次々と倒して行く！

「！朽木さん！！これって、もしかして！！」

「かも知れない。」

「！！遊子ちゃんと夏梨ちゃんが！！でも、でも！！さっきから霊圧

が！霊圧が感じられないよ！…どうしょ朽木さん！！」

そこへ、尸魂界に行っていた三人が現世に戻って来た。

「皆、無事か！」

「………はい。(ム)」「……」

すぐさま織姫は、遊子ちゃんと夏梨ちゃんの父・黒崎一心に話をした。

戦い（前書き）

これから先、色々突っ込みたい所はあると思いますがそこは穩便に
宜しくお願いします。

戦い

夏梨は、この前と同じ夢の中にいた。周りが水晶で囲まれて、空は夜、月が輝いて周りの水晶がキラキラ輝きとても綺麗だ。

そこへ、前にも出てきた青年が、自分の目の前にフワリと現れ夏梨に、

「力が欲しいか？…姉を助けたいか？…家族を守りたいか？」

「！！力が欲しい！遊子を助けたい！家族を守りたい！」

「ならば…私を使え！夏梨！！私はお前の力その物。お前が望めば、私は、いくらでも力を注ごう。だが、お前は、今の私の名を呼ぶことは不可能。」

「???ならどうしたら、どうしたら遊子を助けられるの？」

その時、夏梨の後ろの水晶が輝き、中から女の人が映った事で青年は頷いた。

そして夏梨は遊子を助けたい一心で青年意外周りに目が入っていない為、築かない。

「…夏梨。」

夏梨は、呼び掛けられたので青年を見た。青年の右手から棒の用な槍の用な物が出現し、夏梨の目の前に差し出した。見れば、淡いオレンジ色に輝いて何だか暖かく優しい感じだが一瞬とてつもなく降られてはいけない用な感覚にもなる。

「これを奴に投げる。そおすれば奴は跡形もなく消える。」

「それで、遊子は助かるの？」

青年は、頷き、夏梨に渡した瞬間爆風が舞った。夏梨は思わず目を瞑り体から光が惑い現実世界に戻って行った。

ルキア、井上、一心は、

舜歩を使つて妹達の所に掛けていた。勿論一心が井上を左手で支えながら織姫は必死に振り落とされぬ用に一心にしがみついている。右手には、残魄刀を手に虚を倒して行く形で。

虚を倒しながら進んでいた為思う用に進まなかった。

「これでは拉致が空かない。織姫ちゃん悪いけど少し吹き飛ばされない用にしがみついててくれるかい？」

「え？は、はい！」

「それと、ルキアちゃん俺の後ろに下がって！」

「は、はい、承知した。」

ルキアが、一心の後ろに着くと、一心は斬魄刀を強く握り直す。

そして、

「はあああ!!!」

人降り横に降れば視界に入っていた嘘は全て消し飛んだ。

「ルキアちゃん先を急ごう。」

「…もう良いよ。織姫ちゃん。」

「え、あ、はい!!!」

「（流石は一護の父親殿だ！人振で虚を全滅させてしまうとは…）」
と、思いながら遊子と夏梨が居る場所まで舜歩で急ぎ向かった…。

「遊子と夏梨の霊力はどの辺にあるかだいたい分かっています。ですが突然消えてしまって…早く探さねば…。」

「何だか嫌な予感がするな！織姫ちゃん、ルキアちゃん、手分けして探そ…!!!」

突然ゴゴーンと言う音が響いた

「「「!!!」」」

「何だ！この霊圧は!」

「もしかして、夏梨ちゃん!!!」

三人は急いで目的地を目指した。

「遊子を離せ!!」

「ナンダコノガキ……」

「遊子を食らうなー! 遊子を返せー!!」

更に夏梨の体から青色の光が浮き上がり虚は夏梨を持っている事は出来なくなり夏梨を投げ飛ばした。

「ッ!」

暫くすると遊子の体からオレンジ色の光が、虚は遊子も握る事は出来なくなり遊子までも手放した。

上空

「遊子! 夏梨!」

ルキアが一方踏み出したのを一心が止めた。

「待て! ルキアちゃん。」

「何ゆえ止めるのですか!! 一心殿!」

そこで織姫が、

「でも！早く助けないと遊子ちゃんと夏梨ちゃんが！」

必死に訴える二人に対し一心は、

「遊子と夏梨の霊圧が上がってる。それに…。」

そこで、一心は、言葉を区切り目を細めた。

「オマエラ・ナンナンド・オマエラ・クエバイツガ…！！」

夏梨は手には、オレンジ色で透き通る槍の用な物で虚目掛け投げた。

「やーあああ…！！」

槍は、見事虚ろに命中。

「ぐあああ…！！オマエラヨクモ…！！コレデカッタトオモウナヨ！」

虚は断末魔の叫びながらと共に消えた。

「…何！虚が消えて行く！」

ボタンと夏梨は倒れた。

「…遊子！夏梨！」

「夏梨ちゃん！遊子ちゃん！」

「……。」

三人は、地面に降り立ち、ルキアは遊子の所へ状態を確め直ぐに鬼道で手当てし、悲痛な面持ちで因果の鎖が切れている事を確認した。井上は、夏梨を抱き上げ何処も怪我をしていない事に安堵し又心が張り裂けるほど悲しい衝動にかられた。

そして、一心は、無意識に手の感覚が無くなるほど爪を立て手を握りしめて二人を見つめていた。

…が、織姫が夏梨を抱きしめ体に戻そうとしたが、

「キャ！！弾かれた！！！」

因果の鎖は繋がってるのに何故弾かれたのかが分からなかった。一心は、正気に戻り夏梨と織姫の所に近づく。

手を因果の腐りに手を伸ばし調べたが。

「原因がわからない……此処で考えても拉致が空かねえ、取り敢えず浦原の所に行こう織姫ちゃん。」

「はい。」

「ルキアちゃん！まず二人を浦原の所まで連れていくぞ！良いか？」

「はい、大丈夫です。分かりました。」

そして、遊子の魂魄はルキアが、遊子の肉体は織姫に、そして夏梨の体と魂魄は一心が運んだ。

心配

遊子は、夢の中にいた。

「遊子！遊子！！起きて！」

自分の頬に暖かな手が添えられ、瞼がそっと開く。見れば女の人が目の前に立っていた。

「やっと話す事が出来た。」

女の人にはこやかに微笑む。

「誰ですが貴方は？」

「私は、……です。」

「え！き、聞き取れないよ？」

「遊子はまだ私の名がまだ分からないのね。」

「??？」

女性は遊子に微笑むが、何処か悲しげな目をしている用な感じにも見える。

遊子は、困惑しながら周りを見渡した。

あの時の夢みたいに空が青空で、太陽がでていない為か、水晶が輝きを失なっている用な気がする。

「遊子。妹を今、暗闇から外へ出さなければならぬの。力を貸してくれる。」

「……え？夏梨ちゃん？此処の何処かにいるの？」

慌てて周りを見渡すが、何処までも水晶が彼方此方にあるだけで夏梨の姿は何処にもいない。女性は首を横にふるう。

「違うの遊子。妹は、此処にいるの。」

と、言っただけで自分の手を遊子の胸の辺りに触れる。

夏梨も又夢の中にいた。夏梨は、水晶が立ち並ぶ中に一人走っていた。何処を走っても青年の姿が見えない。声を張り上げて呼んでも、青年は自分の所に来てはくれなかった。周りを見渡せば、空は曇り、月が輝いていない。水晶も輝きを失っている。どうしたら良いか分からず立ち尽くす以外分からなかった。

が、誰かが自分を呼んでいる用な気がして、ふと水晶を見た。

「遊子？そこにいるの？」

水晶の中に遊子が映っている事に築き慌てて水晶に駆け寄った、が、水晶から突然暖かい光と風が吹き夏梨を包み込み水晶の中から腕が出て来て夏梨の腕を捕えた。慌てて夏梨は、腕を振り払おうとするが、意識が朦朧とし眠りについてしまった。

その頃、虚達は護挺十三隊と現世組のお陰で一掃できた。

この出来事が何故起きたか原因を調べる為に、調査隊が配置され調べる事になった、が。

ある一部の人間は、この原因が、わかってしまった為に、後に話し合いと言う形で報告しなければならぬだろう。

浦原、ルキア、井上、石田、茶渡、一心、猫一匹(?) 〓え、あ！も、申し訳ありません夜一様(;)は、浦原商店に集まっていた。

「一心さん、申し訳ありませんが遊子さんと夏梨は二度と肉体には戻れません。」

「……………」

「そんな!! どうして戻れないの!!」

「まさか、井上さんが夏梨さんを戻そうとした時何らかの理由で弾かれてしまったからなのか? だが、現に夏梨さんは因果の鎖は、ちゃんと付いているじゃないか!!」

「そうだぞ浦原! 何故戻れぬ! 遊子は因果の鎖が切れておるが夏梨の鎖は切れておらぬのだぞ!」

「何故でしょうね？」

「「「浦原さん！……！」

「「……。」

「

この時、石田とルキア、茶渡の三人は、浦原に怒りをぶつけ、井上は顔が真っ青になり遊子ちゃんと夏梨ちゃんの兄、一護君に何て説明したら良いのが、わからなかった。

「流石双子と言つか、遊子さんと夏梨さんの体は繋がっています。」

「「「？」

「「……。」

それは魂と魂が繋がっていて霊力その者を共有していると考えられるからです。

「「「？……？」

「「……。」

ですが、問題は遊子さんの方ではなくむしろ…

「夏梨か？」

「おじ様。」

「ええ。」

「夏梨さんは今、肉体と魂魄の間には、因果の鎖に亀裂が少事、かろうじて繋がっているためまだ生きている状態です。遊子さんは因果の腐りは完全に裁ち切れている状態ですので略死んだ状態になりますが、遊子さんが夏梨さんを引っ張って完全なる肉体の死を防いでる状態ですのでこれが何時まで続くか分かりません。」

「肉体に戻れなければ、そのまま死を迎えて虚になるのを待つだけですからね。」

「…其処で、遊子さんと夏梨を死神へと考えていますが如何でしょうか。」

チラッと一心を見る。

「二人をか…!!」

「そんな…!!」

「「な!ム!」」

「「……。」」

このままだと夏梨さんも因果の鎖が完全に裁ち切れて、恐らくお二方は魂葬も出来ないでしょう。まあ一度試しにやってみますが恐らく無理でしょうね。」

「今の遊子さんと夏梨さんは以前の黒崎さんと同じくらい霊力が人並み以上です。なら二人に掛けて見ませんか。」

今まで黙っていた一心が口を開いた。

「夏梨の鎖を完全に断ち切れと……」

その後沈黙が続く……

隣からテッサイの声が皆に響いた。

「店長、遊子殿と夏梨殿が意識を取り戻しました。」

「……わかりました。それでは行きましょうか。」

事実（前書き）

パソコンは、持ってるけど、ネットに繋がってない。悲しい。

事実

「うう？あれ私…私は、…！！夏梨ちゃん！！！」

周りを見渡せば自分達の部屋ではない事に戸惑っていたが、隣に寝ている夏梨の姿にポットするのも束の間。

「夏梨ちゃん起きて？あれ！？…夏梨ちゃんが…二人？…それにこの鎖、何？」

遊子は、自分にも付いている、切れた腐りに触れた。そして、更に隣を見れば自分自身が横に寝かされている事にも築いた。

「……………」

夏梨を見れば、腐りは更に隣に寝ている夏梨に繋がっていて、不思議に思いながらも、

「うう〜ん…ここ何処？遊子？…遊子！！！」

勢い良く起き上がる。遊子の腕を掴み激しく揺さぶる。

「遊子？遊子？えっと！えっと！…さっき目の前に居なかった？」

「…夏梨ちゃん。」

「何？」

遊子は隣を指差す。夏梨は指の先をたどると自分と同じように隣に寝ているのがわかった。

「?…え!? 何で自分が…何この鎖？」

自分が何で寝かされて横たわっているのか? 此処は何処かなのか? 考えていると

襖が静かに開いた。

「起きましたか? お二方? チョイト失礼しますよ〜ん。」

「おっさん? おじさん?」

何時もの飄々とした態度で部屋に入ってきた浦原と、続いて入ってきたのは、井上とルキアである。

「「姉姉! ルキアちゃん!」」

「遊子、夏梨」

「夏梨ちゃん! 遊子ちゃん!」

神妙な面持ちで部屋に入ってきた。

何セルキアは、死神の格好に腰に刀をさして来ていたのだから、夏梨はルキアが死神だと知っているが、遊子は死神だとは知らない。

「…ルキアちゃん? その格好は? その刀は? 何で黒い着物を着てい

るの？」

と、疑問の言葉投げ掛ける遊子を不思議に思っ居る夏梨。襖の奥から聞き慣れた声が聴こえてきた。

「遊子、それは死神と言っただよ。」

「え？お…お父さん??」

「親父!!」

二人は父親を見て目を丸くする。無理もないルキアと同じ格好をして腰に刀を刺して居るのだから…、しかも自分達の父親が幽霊を見れない触れない感じないと思っただから驚くな、と言っ方が無理な話だ。

此に逸早正氣に戻ったのが夏梨である。

「親父も死神だったのか!!…それじゃ一兄も…?」

「知っっている。」

「やっぱり。」

「?…驚かないのか？夏梨。」

「驚くも何も。親父…私達にお守り渡したたる。母さんが昔、私達に作っただお守りだ!とか何て言っただじゃないか!!」

だが、遊子は、この話しに付いていけず困惑するばかり、見兼ねた井上が遊子に分かりやすく説明をした。

まず、貴方の父親は死神である事、そして兄、一護も死神である事、

そしてルキアもまた死神であると言つことを話した。
のだが、遊子は、死神？
と、言う言葉を理解していない為、混乱した。

「そろそろ宜しいでしょうかねえ。本題に入りましょうか。」

皆一斉に浦原の方に振り向く。

「まず、遊子さん。」

「は、はい。」

「あなたの肉体は死んでしまいました。」

「そんな!!」「……え?」

夏梨は、驚きの余り遊子を見た。遊子は、余りの衝撃事実困惑し
一心をマジマジと見た、が…。
一心は、頷き本当に自分が死んでしまったのだと理解した。遊子は、
暫くすると瞳から止めどなく涙が溢れ止まらなくなってしまった。

「うう、う、うわわわん……」

一心は、ただ娘を見守る事しか出来ず。

織姫とルキアは、そんな遊子ちゃんの側に寄り添って心が落ち着く
まで側にいてあげる事しか自分達には出来なかった。

「それでは、夏梨さん。あなた何ですが…まだ、あなたは生きてい
ます。」

「…?私も遊子と同じで死んだんじゃないの?」

「いや、夏梨。お前はまだ死んじゃあいねえよ。」

「どう言う事？それに、まだって？」

「言葉通りの意味つすよ夏梨さん。あなたには、いくつか遣ってもらう事があります。」

「…で、私は、何をすれば良いの？」

一心は、立ち上がり夏梨の肉体に近づき、夏梨を手招きした。

夏梨も立ち上がり、目の前に自分自身が横に寝かされているのを見て言葉を詰まらせ立ち尽くしてしまっただが。

一心が、夏梨の腕を掴み引き寄せ抵抗出来ない用にお腹に腕を廻わした。

「…わ…！」

「何ポート突っ立てるんだ夏梨。」

「な！う、うるさいな髭！！放せ！放せよ！！！」

精一杯抵抗し腕と足をばたつかせるが、後ろから腕を廻わされて体が宙ぶらりんにされている為抵抗の仕様が無い。
見兼ねた浦原が、ニコニコしながら、

「一心さん、其の位にして上げませんか？娘さんチヨット可哀想で

すよ。」

一心は、夏梨を静かに下ろした。…が、

「先から放せって言うてるだろうが！！この髭親父が！！！」

「ううー！！」

夏梨が、見事アッパーを入れノックアウトした。

「うおー！見事だ。夏梨！」

一心は、直ぐに復活し親指を立てリアクションをしながらニコニコと笑う。

「ふう、

やっと夏梨らしくなったな。」

「あー！！」

一心は、先程とは打って変わり真面目な顔をしながら立ち上がり夏梨に向き直った。胸に付いてる因果の鎖を掴み手のひらを胸にあて回復系の鬼道を使った。

「……………？」

「んじゃ夏梨。自分の肉体に入ってる。」

「えっどつやって？」

どうやって、自分の体に入るのかが分からず、困惑していると、
— 心の手が夏梨の背中を押した。

「きゃー！」

バランスを崩して自分の体にダイブする形になってしまい、夏梨の
体が一瞬元に戻った……が、やはり弾かれてしまい魂魄は後ろに吹
っ飛んで、一心が後ろでキャッチした。

「きゃー！！ううう。」

夏梨は、余りの衝撃に耐えられなくなりへたり込んでしまった。

「やはり駄目っすか。参りましたね。どうします？— 一心さん。」

「

「……………」

「— 一心は、何も言わず娘を見ている事しか出来なくなっただが、

「— 少し時間をくれ、浦原。」

「はい。分かりました。では、皆さんチヨイト席を外しましょうか。」

「

と、言っつて皆席を外した。

聴て、その部屋は、一心と遊子、夏梨だけとなった。

一方的（前書き）

すいません。隊長格を全員四十六室に出すなどと言っておきながら
…全然出してません。

一護君、全然喋ってません。

それでもOKと言う方のみ宜しくお願いします。

一方的

一番隊舎にて、山本元柳斎重國率いる隊長、副隊長達が顔を勢揃いしている。

勿論、現世に居る副隊長ルキアを除く。

「今回四十六室に出向く事が出来るのは、この儂と卯ノ花のみとなつた。」

「そんな！我々も行く事は出来ないのですか元柳斎先生！」

「山じい、何とかなんないの？僕達もさあ、行きたいんだけどさあ。」

「だまらっしゃい、儂も何度も論議を唱えたが認めて貰えず、やつと卯ノ花を召喚出来るまで漕ぎ着けた。」

「チィ、四十六室は、何処まで強引なんだ。」

「我々も行く事は来ない、と言う訳か。」

「黒崎一護の容態は大丈夫で在るうか？」

「アイツが居なくちゃ殺し合いが楽しめねえ。」

狛村は、黒崎一護の容態は大丈夫だろうかと心配し、更木は、殺し合いがいなくちゃ楽しめないなど様々な意見が飛び交う。

また、副隊長達も各々意見が飛び交い隊首会は長引いた。

そして、中央四十六室にて、総隊長山本元柳斎重國と四番隊卯ノ花烈が門の前に立った。

中央四十六室にて、総隊長と卯ノ花烈、黒崎一護が論議を繰り広げた。

勿論四十六室の中に入れたのは総隊長と四番隊の卯ノ花烈二人だけで、黒崎一護の体調管理を兼ねて卯ノ花を入れただけだった。

黒崎一護は、椅子に座り、意識がないのかピクリとも動かない。

「我等護挺十三隊は、四十六室に定義し、黒崎一護を此方へ引き渡して頂きたい。」

「何故黒崎一護を其方へ引き渡せなければならぬ。黒崎一護は、藍染惣右助を倒し死神の力を失い人間に成り下がった。そこへ、其方達が黒崎一護を死神に戻した。これは重大な違反で有る。」

「確かに、黒崎一護は、護挺十三隊を救い現世をも救いました。ですが今更ながら捕縛するとは如何なる所存か。」

「黒崎一護は、現世に大量の虚を呼び寄せ人間に被害をもたらした。よって我等四十六室は、黒崎一護を捕縛し捕らえた。」

「しかし、黒崎一護を捕らえた後も現世には、一度大量の虚が出現

しているでは有りませんか。」

「確かに虚はに出現した。だが、黒崎一護が現世に多大な影響を及ぼした事には変わりない。以上これにて閉廷する。」

「お待ちく」閉廷する。これ以上の発言は却下する。」

黒崎一護に寄り添い、体を調べていた卯ノ花が定義した。

「お待ち下さい。四番隊、卯花烈の発言の許可をお許し下さい。」

「……許そう。」

「ありがとうございます。黒崎一護は今、霊力の低下、魂魄によるダメージ、極度の疲労、昏睡状態、栄養失調により衰弱しきっています。」

我等四番隊で、黒崎一護を看護させて頂きたく思います。

「……少しまで……。」

四十六室は論議の末。

「……許可を許す。だが此には条件が有る。」

「はい。」

「……………」。

「え!!」

「何と!!」

二人は、驚き言葉を詰ませた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6895x/>

光と闇

2011年11月7日13時01分発行